
とある魔術と六道仙人

天上天下唯我独尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と六道仙人

【Nコード】

N7657W

【作者名】

天上天下唯我独尊

【あらすじ】

なぜか、死んでしまった敷田崇雄は、『とある魔術の禁書目録』の世界に神様のちからにより転生した？
彼は、とあるの世界でどう生きるのか？

すべてのはじまり

俺の名前は、敷田崇雄

今、俺の目の前に（自称）神と名乗るじーさんがいる

「なにが自称じゃー！ー！！」

「勝つてに人の心の中よむなー！！！！」

3分前・・・・・・・・

ここは、どこだ？

俺の目の前には、なにもない空間が広がっている

「目が覚めたか・・・」

誰だ？このじーさん？

「聞いて驚け！！ワシは、神じゃー！！」

神？ふうーん・・・・・・・・・・って神様だとツツツ！？

「大正解？」

「ってちゃっかり人の心読むな！！！」

「神様だから許してくれ？きみが、なぜここにいるか教えてあげるからさあ？いいじやろ！？」

「しゃあねえなあゝで、教えるよ」

「実は．．人間を1名別世界に転生することに決まったんじゃあちようど崇雄、きみが死んだのできみに決まったんじゃあ」

「って俺死んでるの！？なんで！？」

「それは、いつか分かるそしてきみには、『とある魔術の禁書目録』の世界に行ってもらうちなみに、赤ん坊からはじめてもらう」

赤ん坊からやるのは、いいけど『とある魔術の禁書目録』って今のままいつたら瞬殺される気が．．

「大丈夫じゃ？きみにはあるアニメの技を与えるから？」

「マジか！？それってなに！？」

「それは、行つてからのお楽しみじゃ？」

ボワン

えっ！？

「気をつけて行ってくれ？ちなみに5歳になったら前世記憶が戻るからの？」

「了解？」

そして、俺は黒い穴にのみこまれて行った

「応援しとるぞお、『運命の子』よ．．．．．」

第1話開眼（前書き）

あいさつが遅れてすみませんでした？
天上天下唯我独尊です？
よろしく願います！！

第1話開眼

俺は、転生してからすぐに不幸がだった・・・

うまれた、家庭はごくごく普通だった
両親も、優しく幸せだった、しかしそれは
長続きしなかった・・・

俺が、5歳の頃両親は買い物に行っていて、
俺は留守番をしていたやけに帰りがおそいな
と思いつながら、ニュースを見ていたら速報で
大きな事故が起こり死者は二人でトラックが
軽自動車に突っ込んだらしい

二人の名前が出てきた

俺は、目の前が真っ白になった・・・
その二人とは、両親だったのである

なんでなんだ！？神は、なぜこんな仕打ちをするんだ！？
そこで、俺は、意識を手放した・・・

ここは、どこだ？

目の前には、俺の家が跡形もなくなっていた

俺がやったのか？

近くに、鏡の破片らしきものがあつたので
それを使って自分の顔を見てみた

「これは!？」

俺の目には、『万華鏡写輪眼』が、写っていた……

第1話開眼（後書き）

ありがとうございました？

やっぱり、小説を書くのは、難しいですね（苦笑）

第2話学園都市へ（前書き）

今日は、頑張つて書きます？

第2話学園都市へ

神が言っただのって『写輪眼』のことで、両親の死で『万華鏡写輪眼』が開眼したということか．．．

しかも、この万華鏡写輪眼、うちはイタチとうちはサスケの万華鏡写輪眼が合わさっているってことは絶対失明をしない万華鏡写輪眼か．．．

「父さん、母さん最高のプレゼントをありがとうございます？」

その後、俺は孤児施設に入った

しかし、まわりの見る目はバケモノを見るようだったそれは、そうだよな．．．一人で家を破壊したんだから

だが、ここもおさばらする時がきた

学園都市が、俺のウワサを聞きつけ

フードを被ったあやしい人が、迎えにきた

大体、実験台になるんだろうけど．．．

そしたら、アレイスターの所へ時空間忍術で

行って俺を実験台にすることをやめて貰おうかな．．．

今は、大人しくしよう

「はやく乗れよおクソガキがぁ」

なんだよこのムカつくいいかたは！！
と内思いながら車にしぶしぶ乗った

1時間後・・・・・・・・

「このフードうざってえなあお前にやるよお」
と、言ってこっちを向いてフードを投げてきた

「いらねえーよ」神威で、フードを消した

「それがお前の能力か興味深いなあ」

「ようやく顔を見れたぜ？・・・・お前は？」

こいつは、木原数多！！たしか一方通行に殺られた研究員？

「なんだよお俺の事知ってんのかあ！？」

このままじゃやばい・・・・・・・・！！

「おい、答えろよお」

そろそろ、学園都市についたみたいだな・・・

「今度あったときに教えてやるよ！！」

「ちょっと待て！！」

俺は、時空間忍術で、あそこへ向かった

第2話学園都市へ（後書き）

ありがとうございました！！
今回も、短めですが許してください

第3話 暁（前書き）

今日も、頑張ります？

第3話 暁

ここには、とある窓がないビル．．．

赤い液体が入ったビーカーのなかに男にも女にも、
囚人にも聖人にも見える人物がいた．．．

「すまないあれを逃した」

「そうか．．君は、今すぐ研究所にもどってくれ」

「了解した着いたら連絡する」

ブォン

「あれって俺のことか？」

「きみからきてくれるとは．．探す手間がはぶけたよ
敷田崇雄くん」

「はじめまして最強の魔術師のアレイスター！！」

「どこまで知ってる？」

「さあゝな」

「その目はなんだ？魔術ではなさそうだか？」

「あんたの知らないちからだ」

side 崇雄

上手く誤魔化せたな・・・

「そうか・・・で用件は？」

「俺にやろうとしてる実験を中止してくれ！！」

「いいだろ・・・しかし条件がある」

「なんだ？」

「わたしのもとで、働け」

実験よりマシだからいいや！！

「いいだろ！！ちなみに誰とチームを組むんだ？」

「能力者ではないがある人物と組んで貰う集合場所は、このビルの前だ」

「分かった！！」

ブォン

「面白くなりそうだ・・・」

能力者ではない人物って誰だ？検討がつかない・・・

「よう！！」

誰だ！？・・・って木原数多！？

神様どうかこの人が俺の仲間じゃありませんように！！

「なんだその目は？仲間を見る目じゃねえなこのクソガキッ！！」
「やっぱり仲間だったあゝ！！なんでそんなおこってるんだあゝ！！」

「よくも、俺から逃げてくれたなオイ！！」

「殺気だすのやめろよ俺は、一応五歳だぞしかもまわり見てみる！！」

ギロ

「つちしょうがねえなあゝまあよろしく」

「あ、ああよろしく！！ってメンバー俺達だけ？」

「当たり前だろほかに誰がいる？」

不幸だあッッ！！！！ガク

「落ち込み過ぎだろお・・・で、チーム名は？」
「チーム名・・・そうだ！！」

「暁だ!!」

「暁!?五歳のくせにいいネーミングセンスしやがる」

「だろ・・・」

「カッコつけんじゃねえくソガキツツ!!」

「ぐっ!ふ、不幸だあ・・・」

木原のアップパーがさくれつし俺は意識を手放した

第3話 暁（後書き）

ありがとうございました！！

やっぱり難しい・・・

次回は、一気に原作まで飛ばしたいと思ってます！！

第4話超電磁砲（前書き）

今回は、あの原作キャラが出てきます！！

第4話超電磁砲

「や、やめろおお!!!!」

「『千鳥流し』!!」

「ぐうあああ!!」

「もしもし俺だ例のファイルを回収したがどうすればいい?」

「処分しとけまた盗まれたら厄介だからな夜遅いから
気をつけて帰れよ崇雄くん(笑)」

「木原!!俺はもうガキじゃないんだからやめろよ!!」

「断る!!じゃあなあ!!」

「あいつ切りやがたな!!まあいいやさつさと処分しよ!!」

「『火遁豪華球の術』」

これでよしと.....

.....

俺、敷田崇雄が学園都市に来て11年がたち高校1年生

となつた。ちなみに上条当麻と同じ学校で同じクラスである
Levelは、アレキスターが強引的にLevel6になつた
今はLevel6が俺だと気付かれていないから大丈夫だが、
いつかスキルアウトにお世話になる気がする……

ちなみに暁は相変わらず2人で活動している

そろそろだれか勧誘しようかなあ……

暁の仕事のときは、ナルトの世界の暁が着ている衣と
同じ衣を着ているアレキスターに頼んだらすぐにつくってくれた
ホントにアレキスターには感謝だ!!

今、俺は家に一回帰りカップラーメンを食べてから今散歩している
明日は、学校だけど明日は結構帰りがはやいからなにしようかな
・

あれ!?!公園でスキルアウト?に女の子が絡まれてる!!よし!!

「おいどこ行つてたんだ!?!すみませんうちの連れがお世話を
掛けましたほら行くぞ!!!」
作戦成功!!

「あんただれよ!?!」

「空気読め!!!」
なんだこいつは

「おいおまえよくもじゃましてくれたなあ!!
ただじゃすまないぜ!!!」

「俺は、あまりたたかいたくないんだ
大人しく帰ってくれない？」

しょうがない最近会得した九尾モードをやるか・・・

「イヤだね！！俺達はLevel3のあつまりだ
甘く見られちゃ困るねえ！！よしあの男に
一斉に攻撃しろぞ！！」

ズツバン！！

「この程度か・・・俺の九尾の手を破れないんじゃないか
俺に勝てないぞまだやるか？」

「「「「「いえやりません！！失礼します！！」」」」」

「あいつら逃げるのはやああ！！それより君大丈夫？」

「・・・・・・・・さい」

「えっ？」

「わたしと勝負しなさい！！」

この発言とこの制服もしや・・・

「あなたは、Level5御坂美琴さんですか？」

「そうよ」

やっぱり・・・多分逃げてもムダだな・・・

「分かった!!でも、今日は遅いから今度にしよう!!」

「じゃあアドレス交換するわよほら!!」

「はいはい・・・」

「これでよしと!!」

「じゃあまたな!!」

「じゃあね!!」

俺は、九尾モードで闇へと消えた・・・

「もしもし黒子?敷田崇雄って言う人調べてくれない?」

第4話超電磁砲（後書き）

ありがとうございました！！

原作までにあった出来事は番外編で書きたいと思います！！
今回も、短くてすみません・・・

第5話四人の友達（前書き）

今回も頑張ります!!

第5話四人の友達

「分からないですってええ!!」

「すみませんの．．．わたしくしの友人で凄腕の子がいるのですが．
その子でもダメでしたの．．．」

「あいつに直接聞かなきゃ!!ほら行くわよ!!」

「あの．．．そのわたくしの友人がお姉様に是非お会いしたい
というので今日会ってくれないでしょうか？」

「しょうがないわねえ．．．あいつも呼んでいい？
はやく勝負したいし!!」

「今調べている殿方ですか？いいですわよ!!
じゃあ集合場所はこの近くのファミレスですので
はやく行きましょう!!」

．．．．．

今、俺は上条当麻、土御門元春、青ピヤスと一緒に下校している……

「今日も小萌先生可愛かったな。そんな小萌先生と毎日の様に一緒に補習してるカミヤんが羨ましい……」

「今日も補習だあ……。俺も変わって欲しい……」

「カミヤんは、バカだからしょうがないにや」

「不幸だあ……。はあ……」

「当麻！！ため息をつくともつと幸せが逃げていくぞ！！補習なんて根性で乗り越えろ！！」

ちよつと軍覇をパクってみた！！

「上条さんは、根性なしだからムリです……」

「僕から見ればカミヤんは天国にいると思うんだけど……」

「イヤ地獄だ！！」

「カミヤん！！俺は応援してるにやー」

「俺も応援してるぞ！！」

「僕も悔しいけど応援してるぞ！！」

「みんなありがとう．．．」

プルプル

「あ、電話だ！！誰だ．．．．ゲエ！！」

画面には、『御坂美琴』と表示されていた！！

「もしもしなんのよう？」

「今空いてる！？」

「ああ！！空いてるけど．．．」

「今から、ファミレスの地図をメールで送りからそこに来て！！絶対よ！！じゃあね！！」

めんどくさい．．でも、行つてやるか

「タカヤんもしかして彼女からの電話かにや！？」

「まさか崇雄に彼女がいたなんて．．．」

「僕たちより彼女をつくるなんてひどいやん！！」

「勝手に彼女にするなああ！！まあ俺行くよじゃあな！！」

「じゃあな！！頑張つてこいよ」

当麻がなんかいつているけどムシムシ

俺は、美琴がいるファミレスへと向かった

第5話四人の友達（後書き）

ありがとうございました！！

L e v e l 5 丘原 療多!?(前書き)

お久しぶりです!!

Level 15 丘原 燎多！？

「遅い！！人を呼び出しといてなんだ！！」

俺は御坂に呼ばれとあるファミレスにいる

だが呼んだ本人がこないのだ・・・

なんで俺を呼んどいて遅いんだ！！

呼んだ側は、はやめにくるだろふつううう！！

しかし、そろそろ原作始まらないかな・・・最近仕事も少ないし・・・

・考えていたらやつときた

ようだ・・・

「遅れてゴメンツツ！！」

「呼んだ本人が遅れてくるてどう言うことかな？御坂さん！？」

「だからゴメンって言うてるじゃない！！」

「ハイハイ分かったよ・・・ってお前は！！」

「やっぱりあなたでしたの！！あの時はありがとうございました！

！たしか自己紹介してませんでしたねわたくしの名前は『白井黒子』

ですのよろしくお願いしますの！！」

「よろしくな！！俺の名前h・・・分かっておりますわ！！敷田崇雄さん！！」

「そ、そうか！！」

「あんた達知り合いだったの!？」

「ああ!!そんな感じだ!!」

「では、さっそく本題に入りますの!!あなたのことは調べさせていただきました。しかしあなたの名前、学校名、年齢しかわかりませんでした!!」

イヤな予感が・・・どうかこの予感がハズれますように!!

「あなたのLevelとなぜ隠しているか教えてくださいまし!!」

ハズレなかったああ!!不幸だああ!!

「教えなさいよ!!」

ヤバイ・・・誰かた、助けて・・・

さあ教えてk・・・「遅れてすみませんでした!!」

「タイミングが悪いですよ!!初春!!」

いやいや!!ナイスタイミングです!!

初春さんっ!!って、初春節利!?

「白井さんなんだかわからないけどすみません!!ってあなたはああ!!」

「あっ!!きみは確かあの時白井と一緒にいた!!」

「あの時はありがとうございました！！あの時あなたがいなかったらどうなったか．．」

「当たり前のことをしたままでだよ！！困った時はお互い様だろ！！」

「そうですね！！」

「この子は、わたしくしの同僚の『初春飾利』ですよ！！」

「『初春飾利』ですよ！！よろしくお願いします！！」

「それでこちらの方が．．」

「成り行きできちゃいました『佐天涙子』ですよ！！ちなみにLevel 10ですよ！！」

「佐天さん！！」

俺の名前は、『敷田宗雄』二人ともよろしくな！！」

「わたしは『御坂美琴』よろしくね！！」

「は、はい」

「それじゃここじゃあなんだからゲーセン行こう！！」

「えっつ！！」

「お姉様！！常盤台のトップなのですからもっとお上品なご趣味をおもちゃになられた方が！！」

「うるさいわねえ！！別にいいじゃない！！」

「はやくいくならいこうぜえ！！」

「じゃあいきましょう！！黒子もほら！！」

「わ、分かりました・・・」

・・・

「全然お嬢様らしくありませんでしたねえ！！佐天さん！！」

「だよね・・・意外だった・・・あつすみません！

」！

「なに見てるだ御坂？なるほど！！これがほしいのか・・・！！」

「な、なに言ってるの！！ゲコタよ！！こんな爬虫類なんてほしい女の子なんかないわよ！！」

「俺は、ゲコタなんか言っていないけど？」

「つつ／＼／」

「まあクレープゲーセンいく前にクレープたべてくのもいいとおも
うけど・・・」

「し、しょうがないわね．．．じゃあみんな！！
行くわよ！！」

．．．．．

「なんでこんなにいっぱい人がいるの？」

「学園都市の見学でしようあそこにもバスが
ありますし！！」

「そうなんだ！！初春さんよく分かったね！！」

「それほどでもないですよ！！」

「じゃあ俺と御坂と佐天で買ってくるから
白井と初春は席とつといて！！じゃあいくぞ！！」

そして、俺、御坂、佐天の順でならんだ

「崇雄さんってLevelはなんですか？」

「それがこいつ教えてくれないの！！」

「御坂が俺に勝ったら教えてやるよ！！」

「じゃあ、あとで勝負よ！！」

「別にいいけど時間があつたらな（笑）」

たしか、このあと強盗と戦ってアンチスキルの取り調べを受けるからムリだろうけど!!

とおもっていたら俺の順番がきた

「最後のゲコタストラップです!!どうぞ!？」

ドオン

「わたしのゲコタ……」

しょうがないなあ……

「やるよ俺いらないから!!」

「本当!?!ありがとうっ!!」

といいながら俺のを握ってきた

どんだけゲコタが好きなんだ……後ろの佐天も
苦笑いしてるぞ……

ということでゲコタ事件?も終わってみんなでクレープをたべている

「このクレープうまいなあ!!」

「こっちも美味しいわよ!!食べる?」

「喜んで!!」

俺はこの時気づかなかった．．．白井の怒りに触れることをしたということを．．．

「ホントにこっちもうまいなあ！！」

「でしょ！！」

「あ、あ」

「どうした白井？俺になんかついてるか？」

「よくもお姉様と間接キスをつつ！！」

「「あっ！！／＼／」」

し、しまった！！

白井は足につけている武器を俺にレポートさせてきた

しょうがない．．．

「えっ！？」

ほかの三人もおどろいているまあ当たり前か

「なんでわたくしの武器がすり抜けるのですか！？そしてその赤い眼は！？」

「簡単だ俺の能力で俺の肉体を時空間に飛ばしただけだ。」

「そんなことが出来るのならLevel15よ!!」

ドオゴン!!!

「なに!？」

始まったか!!よしすぐ終わらせる!!

「銀行強盗ですの!!」

「よし!!わたしが!!」

「ダメです!!お姉様は一般人です!!これわたくし達の仕事です!!
!!って崇雄さん!!」

「お前一人か？」

「ああ!!一人だ!!」

おかしい!!原作では三人だったはず!!

「じゃあさっそくだか死んで貰おうか!!」

銀行強盗は、大きな炎の玉を投げてきた

この炎の玉Level13どころじゃない!!

Level15ぐらいだ!!原作ではLevel13だったのに!!
かし

「『水遁水龍弾』!!」

普通の炎だったら消えて水龍弾が銀行強盗にあたるはずだったかし……

「なに！！消えるどころかさつきと比べ物にならないぐらいに大きくなってる！！」

「さっきの水の龍を見たかぎりLevel15かでも9人名もいたんだな……残念だが終わりだ！！」

「崇雄さん！！！」

「『神威』」

ブウオン

「炎の玉が消えた……あいつてなにものなの？」

「な、なに！！」

「お前の炎は厄介だな……」

「お前は誰だ！？」

「そういう時は、お前から名乗るじゃないのか？」

「そうだな！！俺は………Level
5 第八位『丘原 燎多』だ！！」

L e v e l 5 丘原 療多!?(後書き)

ありがとうございます!!

黒子の口調は難しい・・・

主人公の設定（前書き）

お久しぶりです!!

色々あって更新が遅れましたごめんなさい・・・

ここでは、主人公の設定を書きたいと思います!!

主人公の設定

名前：敷田崇雄
しきたかお

特徴：顔は、NARUTOの弥彦でイケメンの部類
細マッチョで普段は制服ですごしている

性格：心優しく友達思いしかし、暗部の仕事になると躊躇なく人を殺す（どうしようもないほど悪い奴のときだけ）自分は、鈍感ではないと思っているが実はちょっと鈍感

能力：永遠の万華鏡写輪眼・・・NARUTOの歴代の万華鏡写輪眼開眼者の能力を伝える

九尾の力・・・自身の中にいる九尾からもらう力。九尾とはいまでは親友

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7657w/>

とある魔術と六道仙人

2012年1月14日15時48分発行